

終生を支配する 幼少年時代の体験

太田 愛 人

幼少年に対する保育教育が、さまざまな方面から検討されてきている昨今であるが、問題は常に知に偏重していくのが日本の現象のようである。生活経験を大切にしなければならぬ幼時期に、とかく文字を覚えることが優先し、身体の発育がさかんな少年期において、生活感を伴わない知育が先ばしりをしている。本来、知と共に発育するはずの五感の衰退現象が、幼少年時代から始ま

るといふ恐るべき状況に子供たちがおかれていますと見てもいいであろう。味覚ひとつとっても、一見、文明の進展期と見られている現代において、画一化したものを半ば強制的に食べさせられているのを、教育の現場で目撃することができ

る。幼少年時代における身体的な事柄が、成人してから大きな影響を与える例は、食生活ひとつとっ

でも考えさせられるが、こうしたフィジカル（身体的）とは別に、メタフィジカル（精神的）な面を見すごしにされてはいないであろうか。

表題に掲げた言葉は、新渡戸稲造が『人生読本』の中に収めた一連の文章につけた題名である。これは昭和九年、実業の日本社から出版された本で、その時、新渡戸は死去していた。いわば新渡戸の晩年の感慨を淡々と述べた人生論で、読む者を、しみじみとした人生観照の世界に導いてくれる作品である。

新渡戸は揮毫を求められると、喜んで筆を執る人で、私の処にも軸がある。私の友人の弁護士事務所にはロングフェローの詩の一行を毛筆で横文字を書いた扁額がある。これまでに私の見たところでは、左に掲げた和歌を書く例が比較的多いようである。

見る人の心々に任せおきて

高嶺にさめる秋の夜の月

私は新渡戸の作と思っていたが、新渡戸二十何歳のころ、初めて読んだ古歌の引用であることを知ったのは「終生を支配する幼少年の体験」を読んだあとである。歌や俳句や詩に託して自分の思想を表現しようとする試みは、新渡戸の得意な方法で、大著『農業本論』の中で、農を説明するのに詩をもつてする手法が多いのに驚かされる。当時の書評に詩の引用が多いことを指摘されると、新渡戸は、詩歌は最もよく人間の心を表現している、と弁明している。

この古歌を引用したのは、次のような幼少年時代の挿話に由来している。そこは幼少年時代の心や感情がいかに大切であり、分別ある大人といえども立ち入ることが許されない世界があることを淡々と述べている。

「小遣で兄の為に買った手袋」という小見出しの文章の冒頭に一つの問題を提起している。「実に子供の時の印象ほど強く且つ長く残るものはない

い。或人は人の性格は五つ前に定まるといふたが果して何歳にして定まるものかは研究家に任せて、自分の体験に依つても、兎に角十四、五までには大概の思想の傾向が解るかと思はれる」と前置きして十一、二歳の頃の事件を回想している。

要約すると、病身の兄と共に東京の叔父のもとで勉強していた稲造は、丈夫なからだをもち、時には三歳上の兄をとちちめてなぐることもあった。病める兄のため、叔父からもらった二十銭の小使銭で、銀座尾張町の唐物屋から安売りの革手袋を買う。普段の十分の一の値だから買ったのである。塾に帰っても次の日曜日まで風呂に入れず、煎餅も団子も食わず自分では兄孝行したつもりでいた。しかし次の土曜日に叔父の家に行くと、家の空気が重苦しく不愉快で、叔父から夜中に起こされて、いきなり拳骨でなぐられた。叔父の言いは「貴様は何といふ心得違ひするのだ。他のことなら兎に角、他人のものに手をかけると

は、もし国のお母さんに聞えたら、私も申し訳がない」というのである。叔母は「証拠があるから駄目」と言い訳を拒否する。理由は兄のために買った舶来の手袋が二十銭で買えるわけがない、というのである。また一週間、小使銭なしで済むわけがないからきつとよそからお金を取って来たか、家から持ち出したのだろうと面責されたのである。

この時の感情を、晩年の新渡戸は「何といふ言葉を以て形容すべきか、この叔母さんは邪見な人だ、我々兄弟にとっては継母の如き人だと、くやしきもあり悲しくもあり、事実を述べて、かの銀座の店に連れて行きて身の証を立てんと思つたが、先ずこれもやめよう、彼女の思ふままに任せやう」と思い絶対の沈黙を守った。というのである。その時の決心を忘れることなく、老年になつても一身の弁護をしないのは十一歳の時からの癖である、と述べ、右の古歌を発見した時、「これ

なる哉これなる哉」と思ったという。

少年時代の決心が老年まで続く稀有な例をここに見ることができる。ここには知を超えた情、意の世界を垣間見ることができる。こうした情、とくに意を訓練し、導くためにいったい何があるのかを改めて考えさせられる。新渡戸の場合『武士道』に表明された訓練をあげることができるが、現代のような古いしきたりを見失い、宗教に無関心な時代に、何によって意志を練りあげることができるか、を改めて考えさせられる。新渡戸の肖像のある五千円札を手にして、それぞれの幼少時に感慨を及ぼすことも決して無意義ではないであろう。

(上星川教会)

